

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

フレーベルの『人間の教育』の「全体の基礎づけ」とリトミックに関する研究

著者	高牧 恵里
雑誌名	武蔵野大学教職研究センター紀要
号	4
ページ	25-36
発行年	2016-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000183/

フレーベルの『人間の教育』の「全体の基礎づけ」と リトミックに関する研究

A Study on “Foundations of the Whole” of Fröbel’s *Human Education*
and Eurhythmics of Jaques-Dalcroze

高 牧 恵 里^{*}
TAKAMAKI Eri

はじめに

フレーベル（Friedrich Fröbel, 1782～1852）は、ドイツの教育思想家・実践家である。彼は、イェナ大学で自然科学、建築等を学んだ後に、ペスタロッチ主義者のグルーナーに出会い、ペスタロッチ教育の継承を目指した¹。1816年にカイルハウ学園をつくり、ドイツの精神に基づく教育目標を掲げ、教育に従事していた。1837年、ブランケンブルグに「幼児期及び、青少年のための作業衝動を育むための施設」を設立し、「恩物」の考案、普及に力を注いだ。1840年に世界最初の幼稚園「一般ドイツ幼稚園」を設立、さらにその教育を広める為の教員養成も行い、幼稚園教育の拡大に力を注いだ。

彼は、1826年にカイルハウ学園の教育内容を叙述した教育思想の根幹とも言うべき『人間の教育』という著書を出版している。莊司雅子（Shoji, Masako, 1909～1998）氏は、「当時の教育学的及び哲学的見解の一大集成であった。」と記している²。『人間の教育』の冒頭に基礎論（「第一篇 全体の基礎づけ」）があり、彼の教育学の基となる「神と自然と人間との関係」が述べられている。その後人間に対する「教育の目標及び教育原理」について述べられている。

彼は、同書の「第二篇 幼児期の人間」において、「身体や四肢の活動から生まれるリズムカルな拍子のとれた運動により、内なる生命を子どもに意識させようとする³。」とし、初めてリズム教育に触れている。これまでフレーベルの考えた音楽教育について検討がなされてきたが、「全体の基礎づけ」を含んだものはほとんどない。本稿では、この「全体の基礎づけ」とジャック＝ダルクローズ（Jaques-Dalcroze, Emile, 1865～1950）によるリトミックの教育原理の関係について検討したい。（以降、J＝ダルクローズとする。）

1. 研究の目的

リトミック事典の「フリードリヒ・フレーベル」の項目に、「幼児を対象にしたリトミック授

^{*}武蔵野大学教職研究センター

業を知っている者は、リトミックとフレーベルのアイディアとの近接を即座に発見するだろう⁴。」と実際のな方法について指摘がなされている。

フレーベルとJ＝ダルクローズの教育思想を基に、フレーベルの『人間の教育』の「全体の基礎づけ」とJ＝ダルクローズの『リズムと音楽と教育』を比較検討し、フレーベルの教育の中に見られる音楽教育と、J＝ダルクローズの音楽教育に共通点が見られることを明らかにすることを目的とする。

2. 研究の対象と方法

フレーベルの『人間の教育』第一篇「全体の基礎づけ」の1～15に述べられている論点と、呼応するJ＝ダルクローズのリトミック論文集である『リズムと音楽と教育』から、類似点、あるいは相違点等を抜き出し、検討を行う。

3. フレーベルの『人間の教育』とJ＝ダルクローズの『リズムと音楽と教育』について

フレーベルは、1820年から1824年の間に書かれた教育思想に関する論文を出版したことにより、彼が経営していたカイルハウ学園の教育は、世間から認められ、生徒数も増えた。しかし、この新教育に対し、自由主義、社会主義の疑いをかけられ、学園に調査が入ったが、ギュンダー公爵、ルードルシュタット侯国宗務局監督長ツェー（Zeh, Christian, 生没年不詳）、カロリネ公爵夫人（Caroline, Fürstin-Regentin, 生没年不詳）による公正な判断が認められ、フレーベルの教育が高く評価された。しかし、学園経営は厳しく、このような苦労の中にあったが、人間探求の思想は一層昇華され、1826年『人間の教育』として出版された⁵。

J＝ダルクローズは、1892年にジュネーブ音楽院の和声学の教授として教鞭をとっていた頃、聴感覚を伸ばす訓練から、身体全体の筋肉と神経の働きにより、リズムカルな性質のものである音楽的感觉を高めることができると考えた。そこで、行進と停止の訓練から、耳で聴く音楽リズムを身体的に反応させることから、リトミックを生み出したとしている。『リズムと音楽と教育』は、J＝ダルクローズがリトミックを創案し、完成させるまでの論文を年代順にまとめたものであり、リトミックの一番大事な理論を明確にした所説である⁶。

4. フレーベルの『人間の教育』の「第一篇 全体の基礎づけ」とJ＝ダルクローズの『リズムと音楽と教育』の比較検討について

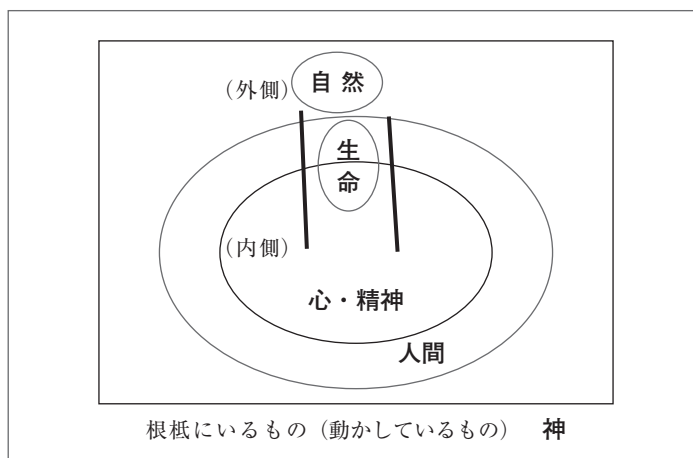
フレーベルの『人間の教育』の「第一篇 全体の基礎づけ」とJ＝ダルクローズの『リズムと音楽と教育』の比較検討の結果、以下の各項目から重要なところを取り出し、検討した。

（以降、フレーベルの『人間の教育』「第一篇 全体の基礎づけ」は「F」、J＝ダルクローズの『リズムと音楽と教育』は「J＝D」と表示する。）

F (1) :「すべてのもののなかに、永遠の法則（神的なもの）が、宿り、働き、かつ支配している。この法則は、外なるもの、すなわち、自然のなかにも、内なるもの、すなわち精神のなかにも、自然と精神を統一するもの、すなわち生命のなかにも、つねに同様に、明瞭に、かつ判明に現われてきたし、またげんに現われている⁷。」

ここに述べられている「神・人間・自然等の関係」は、図にすると次のように捉えられる。

(図1) 【神・人間・自然等の関係】



J = D :「音楽ほど生命に近い芸術はありません。生命そのものであるともいえましょう⁸。」としている。また、「昔のように教育者たちからの心をかきたて、音楽教育にもかつて教育全体の中に占めていた地位を守ってくれるはずの宗教的信仰は、明らかに今はもう消え失せている⁹。」とも述べている。しかしながら、J = ダルクローズは、モンテスキュー (Montesquieu, Charles-Louis de Secondat, Baron de La Brède et de, 1689～1755) の以下の言葉を引用し、「才能とは、神が私たちにひそかに贈り給い、私たちがそれと知らずに発現する神の賜物である¹⁰。」としている。

【結果】両氏の「神」に対する表現の違いがあるが、教育に神の見守りがあることを示しているので、共通認識があると捉えることができる。

両者が活躍した時代は、ヨーロッパにおいて産業革命が起き、都市部では産業が発展した。今まで教会を中心とした地域で暮らしていた人々が、労働の場を求めて産業の栄える地域へ移動したことから、地域社会が変化していった。時代背景として、教会が地域を取りまとめる役割が薄れ、宗教心も変化し、「神」が絶対的存在ではなくなる時代へと移り変わってしまったことが背景にあると捉えられる。そのことを、J = ダルクローズは、「宗教的信仰は、消え失せている。」と述べている。

F (2) :「人間の使命および職分を意識し、思惟し、認識する存在としての人間を刺戟し、指導して、その内なる法則（その神的なもの）を、意識的に、また自己の決定を持って、純粹かつ完

全に表現させるようにすること、及びそのための方法や手段を提示すること、これが、人間の教育である¹¹。」

フレーベルは、人間は何であるかを説いており、人間の内面を見つめ、自分の意志を持って生きていくことの重要性を繰り返し述べている。子どもの中には神性が存在し、教育次第で高度なものを引き出すことができるとしている。

J = D：「子どもの身体の中で、リズムカルな動きに際して共働するすべてのもの、筋肉や神経など自然な刺激が働くと振動し、緊張・弛緩するすべてのものを鍛えなければならないのである。(中略)身体そのものが、音と私たちの思惟の間の媒介者の役割を演じ、私たちの感情をじかに表現する楽器となるような音楽教育を夢に描いている¹²。」

【結果】子どものもって生まれてきたものの中から、表現する能力を引き出すことが教育であるという考え方は、共通する認識と捉えることができる。

F (3)：「あの永遠の法則を認識すること、それを意識化すること、この法則の根拠や本質を、またその作用の全体やその連関やその生き生きとした活動を洞察すること、生命に関して知ること、むしろ生命を全体として知ること、これが学であり、生命の学である¹³。」

J = D：「子どもに自分のことを知ること、自分を支配し、自分の人格性を把握することを学ばせることである¹⁴。」

フレーベルは、『人間の教育』の全体の基礎づけの中で、「神」の存在を示し、その中で教育が成立していると説いているが、J = ダルクローズは、音楽教育が単に音楽教育に無関心な役人を喜ばすためのパフォーマンスに過ぎない状況を嘆いている。フレーベルは、教育を「生命の知恵(人間を教育すること)」と最高の目的にしており、J = ダルクローズは、音楽教育が、科学教育や道徳教育と同等に行われることを願っているのである。

フレーベルの「生命の学」には、3種類の学問があるとし、J = ダルクローズの教育との比較を表にまとめると以下のとおりである。

- ①意識的、思惟的、認識的な存在としての人間の知識、そして人間自身における表現や実施に関係づけられた知識が「教育学」である。
- ②思惟し、認識する存在である人間を、自己の職分の自覚と使命の達成に導く処方「教育論」である。
- ③人間の使命を達成するために、認識や洞察、知識を自由に適用することが「教育技術」である¹⁵。

（表 1）

	フレーベル 『人間の教育』	J = ダルクローズ 『リズムと音楽と教育』
①教育学 Erziehungswissenschaft	意識的、思维的、認識的な存在としての人間の知識、人間自身における表現や実施に関係づけられた知識	個人の諸々の生命力全体を結合すること
②教育論 Erziehungslehre	自己の職分の自覚と使命の達成に導く処方	ソルフェージュ リトミック 即興演奏
③教育技術 Erziehungskunst ¹⁶	認識や洞察、知識を自由に適用すること ¹⁷	音の聞き分け 身体を音楽に合わせて動かすこと (リズムの体験) 等

それに対し、J = ダルクローズにおける「教育学」は、個人の諸々の生命力全体を結合させることとし、身体の機能と精神的機能の間の親密な相互関係を確立すること¹⁸、それは、音楽を生理学と心理学と物理学の3つの基本的関係が成立すると考えた¹⁹。

「教育論」としては、ソルフェージュ、リトミック、即興演奏等の音楽教育のアプローチと考えられ、「教育技術」は、「内的聴取力」を上げる「音の聴き分け」や身体でリズム体験する等の具体的な指導に当たると捉えることができる。

F (4) :「知恵を求めることは、人間の最高の目的である、人間の自己決定の最高の行為である。自己自身および他人を教育すること、しかも意識と自由と自己決定とを持って教育すること、これが知恵の二重の行為である²⁰。」

J = D :「リトミックの教育の目的は、学んだあと、生徒たちが「知っています」ではなく、「やりました」といって—自分を表現したいという欲求を自分のうちに生み出すようにすることである。なぜなら、強い感動を味わえば、人は、自分なりの仕方、他の人々にそれを伝えたいという欲求を感じるものなのである²¹。」

【結果】 知的なことを自分自身で求めて教育を受けることは、人間が幸せになるために必要なことである。人が教育に対し、自己意識を持つようになった時に教育の相互作用が実るのである。教育の相互作用とリトミックの教育の目的については、知恵の二重行為に値するため、共通認識と捉えることができる。

F (5) :「教育は、人間が、自己自身に関して、また自己自身において、自己を明確に認識し、自然と和し、神と一つになるように、人間を導くべきであり、またそうでなければならない。それゆえ、教育は、人間をして、自己自身および人間を認識せしめ、さらに神および自然を認識せしめ、そしてかかる認識に基づいて、純粹神聖な生命を実現せしめるように、人間を高めなければならない²²。」

J = D :「自分自身の持つさまざまな能力を評価し、そのバランスを保ち、それらを個人生活上の必要にも、社会生活上の必要にも役立たせてくれる経験には素直に従うよう導くこと²³。」と

している。

【結果】フレーベルが「自然を認識せしめ…」というところは、J=ダルクローズの音楽へ導くための前段階のリズム体験等に当たると捉えることができる。

F (6):「外見は善良にみえる子供でも、しばしば内心は善良ではない。すなわち善を、自己決定によって、あるいは愛、尊敬および承認の心から、なそうとしないものがある。また、外見は粗暴、強情、我儘で、少しも善良にみえない幼児や少年でも、しばしば内心では自己決定を持って善を表現しようと、極めて活発に、極めて熱心に、極めて力強く、努力しているものがある²⁴。」
J = D:「音楽的才能というのは、一人ひとりの子どもの中に奥深く隠れたままであって、様々な理由から、表に現す手段が見出せないのである。それは、あたかも地下を流れている水脈が、強力なつるはしで道を開くまでは地表に湧き出てこないのと同様である。子どもの音楽性を発掘するのは、教育の仕事である。どうすればこの音楽性は幼い時期に目覚めるのであろうか。外に現れる徴候はどんなものなのか²⁵。」

【結果】子どもは、外見だけで推し量れないものがある。子どもを教育するには、水脈を見つけるのに苦労するくらい「善」の部分を発掘することが難しいが、子どもの自己決定を持って表現しようとしていることや、音楽性の目覚めを見守らなければならない点では、共通認識があると捉えることができる。

F (7):「教育、教授、および教訓は、根源的にどうしても受動的、追隨的（たんに防禦的、保護的）であるべきで、決して命令的、規定的、干渉的であってはならない²⁶。」

J = D:「子どもに音楽に興味を抱かせる、そして、なくてはならないものである音楽を好きにさせる、最上の手段なのである。何度も繰り返しても言い過ぎではない大切なことは、子どもが音楽を心に感じ取り、喜び迎え、音楽において心と身体が合一すること一耳でしっかり聴くばかりでなく、自分の全存在で聴き入ることなのである²⁷。」

【結果】子どもに音楽に興味を抱かせて聴くことは、あくまでも命令的な導きであってはならない。その導きから、心と身体の合一に導かれることは、命令的ではないと捉えることができる。

F (8):「純粹に規定的、要求的、命令的な人間教育の方法は、本来、明確な自己意識の覚醒をまって、神と人間の合一的生命の開始をまって、父と子、弟子と師匠の相互理解と共同の生命の開始の後に、はじめて始まるものである。というのは、そのときには、真理は、全体の本質と個人の本性から導き出され、認識されうるからである²⁸。」

J = D:「音楽教育が、生徒に内的聴取力（記憶の中でもはっきりと音楽を聴き取る能力）を呼び覚ますことを目指すべきである。それはまた、人格の発達、思考と感覚の連携機構の完成へと自然につながっていくものと私たちは信じている。それは、経験と記憶、経験と想像、(無意識のうちに)自動的に達成されるものと意識して行われるもの、意識されているものと気質や夢想の指令によるものなどの間の相互関係を円滑にすることである²⁹。」

【結果】フレーベルの自己意識の覚醒は、J = ダルクローズのリトミックの内的聴取力を呼び覚ますことと合致しており、双方の目指すべき方向性が同じであることを意味している。

F (9～11)：「命令的、干渉的教育が扱う対象は、明白に生きた思想（基礎を持った真の理念＝キリスト教）、それ以前から存在し、承認を受けて来ている模範的なもの（旧教的な考え）の二つである。模範的な生命は、その本質、その努力したことに基づくのであり、形式によるものではない。

最も完全な模範的生命は、自己の存在や自己の出現や自己の生命の根源的な原初的根拠を自己自身の中に明瞭にかつ生き生きと認識した生命である。この永遠の模範的生命は、自己の永遠の模範の模像であることを要請している³⁰。」

J = D：「生徒たちにこのニュアンス付けやフレージングの主要教則を教えてみると、彼らはこの教則が呼び覚ます興味、それを実際に適用してみることによる歓びを目の当たりにして、驚き且つ強く心を打たれることであろう。子どもの模倣本能に働きかけることにかまけすぎて、その分析の精神や創作の能力を損ねているのである。（中略）子どもがいちばん好むのは、楽しみの種になる事物を、想像の中で自ら紡ぎだし、飾り立てることなのである³¹。」

【結果】 フレーベルは、キリスト教を基盤とした法則にのっとり、自己決定、自己選択をもって、自己自身から表出させることが、教育や教訓の目的であるとしている。

J = Dは、音楽の主要な教則が、子どもの音楽に対する興味を引き出す引き金になるとしている。

両者は、教育、音楽において、揺るがない永遠の法則があるとしている。法則に則らず、表面的な模倣は、向上させる働きかけにならず、むしろ後退させることになる。法則に対し、努力を重ねて表出する結果こそが大事であるとしている。

F (12)：「生きた思想や精神的に永遠に模範となるものは、規定するもの、要求するものとして現われている。（中略）善い教育、正しい教授、真の教訓においては、必然性が自由を、法則が自己決定を、外的強制が内心の自由意思を、外的憎悪が内心の愛を喚起する。憎悪が憎悪を生み、法則が欺瞞と犯罪を、強制が奴隷根性を、必然性が盲従心を生むところでは、圧迫が破壊と墮落を生じ、重荷が破滅と卑賤を招くところでは、さらに峻厳と苛酷とが反抗と不実を生むところでは、すべての教育、すなわち教育、教訓、教授の作用は、すべて破壊される。善い教育を達成するためには、命令として現われるすべてのものは、追隨的な作用を営むのでなければならない³²。」

J = D：「しかし、すべてのこどもが天才であるわけではなく、母親と父親が彼らのすべての能力を伸長させようと懸命に取り組むことが重要である。母親は子どもが宿題をしなかったといってとがめるだけで満足するのではなく、彼女は、それをどのようにするのかを教えなくてはならない。言い換えるならば、彼女は例を説き進める必要がある。大人は論理的な思考をすることに耐えられるが、一方子どもはそうではない。なぜならば説教をするために興奮は必要なく、説教は長くはいけなからだ。もしも子どもが思慮深かったら母親に次のように言うだろう。「おお、お母さん、あなたは先日、同じことを私にしたよ。」すると次のように答えなければならない。「もちろんです。私のちびちゃん。私はあなたに同じことをしました。しかし、分別のある大人として率直に認めますが、私は間違えました。ただ、間違いが繰り返されることはありません。」

子どもは多くの場合、疑いもなくとても正直に言う。私たちにもたらされる貴重なしるしが有益であることを知る必要がある。そしてそれは子どもが幼ければ幼いほど必要になる³³。」

【結果】J＝ダルクローズは、音楽の中に、上記のように対象と対立の可能性を示唆している。

フレーベルも教育の教授方法について、相対する考え方を示しながら、見本となる教育内容を永遠の法則とともに示している。

両者とも、教育の方法について、相対する考え方からより良い考え方を見出すという点において、共通認識があると捉えることができる。

F (13)：「正しい教育者、及び教師は、どんなことを要求し、規定するさいにも、同時に両端的、両面的でなければならない。要求(教育者)と服従(生徒)との間に第三者のものがあがるが、第三者(神)に従い、その支配に身を委ねることが正しい感情をもつので、誤りがない³⁴。」

J＝D：子どもの創作活動において、「ひとたび、ニュアンスづけの初歩的な教則を覚えてしまえば、感情表現、リズムや感動に発するアクセントづけといった自然な補足で飾ることを許してやらなければ、彼は、旋律を歌っても、もはや歓びを感じない。何の興味もないまま、ただ譜面どおりに歌っているだけ。まるで苦役に服しているみたいなのだ。だが、『ニュアンスをつけなさい!』といった途端、子どもの目は歓びに輝き、顔はパツと明るくなる。(中略)彼は、熱をこめて歌い、生き生きとしたものにして幸せに浸るのである。歌い終わったところで、彼に『君はどこで間違えたか』と尋ねてみると、彼は、確信をもって『僕のリズムは良くありません、強く歌いすぎました、徐々に速度を落とすのを忘れました』と、はっきりと答えよう!彼にとっては、自分の作品にさらに手を加えること、磨きをかけること、自分の生命を作品に伝えること、自分の熱情で作品を生き生きとしたものにするには、みんな快いことなのである。創作意欲はすべて子どもに共通のもので、教師たるものは、この嗜好とこの気質を利用するどんな機会でも逃してはならない³⁵。」

【結果】フレーベルは、「第三者(神)に従い、支配に身を委ねることが正しい感情をもつので、見誤りがない。」としている。それに対して、J＝ダルクローズは、教師の一指導により、演奏にニュアンスが付き、自分の感情を乗せることができるようになる。また、演奏を冷静に自分の耳で確かめる能力、事例の批判や分析する精神を持つことは、フレーベルとJ＝ダルクローズとの共通の認識と捉えることができる。

F (14)：「教授の必然的な一般的定式は、『これを為せ、この特定の関係において、汝の行為から何が結果し、それがいかなる認識へ汝を導くかを見よ。』各人に対する生命それ自体のための処方は一『彼の精神的本質、したがって、汝のなかに生きているもの、汝の生命を、外的なものにおいて、および外的なものを通して、行為の中に純粹に表明せよ。そして、汝の本質が何を要求し、またそれがいかなる性質をもつかを見よ³⁶。』」

J＝D：「教師の役割は、子どもたちの意志を導き、人格を誕生させることにある。あれらに善だけ、悪だけを教えるよりも、善と悪、美と醜の間で選択できる能力を与えた方が、ずっと良いのである。彼らの精神に穏やかな光を点し、その光の照り返しが輝きを増していくことが必要なのである³⁷。」

【結果】フレーベルの「人間の教育」の14番目の項目に関して、フレーベル研究家であった岩崎次男氏は、フレーベルが「教育の公式」として「カイルハウ小論文集」にも述べているとし、カ

イルハウ教育舎での教育において、表現や行動が認識や知識より先行させた方が良いとしている。表現や行動を介しての生徒の考察の対象になっている事物やそのものの本質に従い、認識や知識が自主的に形成、創造されるように指導され、獲得された認識や知識が子どもたちに再び表現や行動に検討し、発展させられることを述べている³⁸。この表現や行動を先行し、後から認識や知識を取り組む教授法は、ダルクローズのリトミック教育方法と共通している点と捉えることができる。

F (15)：「根源的な神的本質をあらゆる側面から涵養することによって、それを人間の生命の中に表現することが、すべての教育や教訓及び、すべての教授の唯一の目的、唯一の目標として否定することができないほど明瞭にわれわれの前に現われてくる³⁹。」

J = D：①「赤の他人が、親の思考流儀とはまったく照応しない考えを子どもの幼い脳味噌に詰め込んでいるのに、親はそのことは大きな問題にしない。逆に、子どもの身体に同じことをする一均斉をとらせ、強靱さや柔軟性を与え、自然な優雅さを身につけさせようと試みる—ことは望まないのである⁴⁰。」

②「子どもが音楽を心に感じとり、喜び迎え、音楽において心と身体が合一すること一耳でしっかり聴くばかりでなく、自分の全存在で聴き入ることなのである⁴¹。」

【結果】 フレーベルの「人間の教育」の15番目の項目に関して、岩崎次男氏は、フレーベルの「児童観」として述べられているとしている。フレーベルは、「子どもは、神的なものが人間の姿を取って現れたもの」であるとし、さらに「子どもは人類の必然的本質の一員」とし、親の養育責任について、自覚を求めている。「子どもは神と自然の本質」、つまり、「神（精神）」は、「自然（身体）」と調和一致させて、発展、形成しなければならないとしている⁴²。

ダルクローズは、他人が教えようとする知的な部分に親が関心を持たない場合は、親の教育が必要になるとしており、親の養育に対する考え方は、二人とも共通していると考えられる。そして、「音楽を心と身体で感じ取ること」は、子どもの神的本質を育てる為の統一的な発達、個性的かつ諸能力のある多面的発達につながると考えると、両者ともに共通する部分である。

5. 考察

本稿において、フレーベルの『人間の教育』とJ = ダルクローズの『リズムと音楽と教育』を比較検討し、以下のようにまとめた。

- (1) 両氏とも、教育の根柢には「神」の存在が感じられた。「神」に対する表現の違いがあるが、教育に神の見守りがあることを示しているので、共通認識があると捉えることができる。
- (2) 子どものもって生まれてきたものの中から、表現する能力を引き出すことが教育であるという考え方は、共通する認識と捉えることができる。
- (3) フレーベルの「生命の学」には、3種類の学問があるとし、J = ダルクローズの教育は以下のように共通部分があると捉えることができる。

- ①フレーベルの「意識的、思惟的、認識的な存在としての人間の知識」である「教育学」に対し、J = ダルクローズは、「諸々の生命力全体を結合すること」と捉えることができる。

- ②「自己の職分の自覚と使命の達成に導く処方」である「教育論」に対し、J = ダルクローズは、「ソルフェージュ、リトミック、即興演奏」と捉えることができる。
- ③「認識や洞察、知識を自由に適用すること」である「教育技術」に対し、J = ダルクローズは、「音の聞き分け、リズムの体験」と捉えることができる。
- (4) 人が教育に対し、自己意識を持つようになった時に教育の相互作用が実る。教育の相互作用とリトミックの教育の目的については、知恵の二重行為に値するため、共通認識と捉えることができる。
- (5) フレーベルが「自然を認識せしめ…」というところは、J = ダルクローズの音楽へ導くための前段階のリズム体験等に当たると捉えることができる。
- (6) 子どもは、外見だけで推し量れないものがある。子どもを教育するには、水脈を見つけるのに苦労するくらい「善」の部分を発掘することが難しいが、子どもの自己決定を持って表現しようとしていることや音楽性の目覚めを見守らなければならない点では、共通認識があると捉えることができる。
- (7) 子どもに音楽に興味を抱かせて聴くことは、あくまでも命令的な導きであってはならない。その導きから、心と身体の合一に導かれることは、命令的ではないと捉えることができる。
- (8) フレーベルの自己意識の覚醒は、J = ダルクローズのリトミックの内的聴取力を呼び覚ますことと合致しており、双方の目指すべき方向性が同じであることを意味している。
- (9～11) フレーベルは、キリスト教を基盤とした法則に則り、自己決定、自己選択をもって、自己自身から表出させることが、教育や教訓の目的であるとしている。J = ダルクローズは、音楽の主要な教則が、子どもの音楽に対する興味を引き出す引き金になるとしている。両者は、教育、音楽において、揺るがない永遠の法則があるとしている。法則に則らず、表面的な模倣は、向上させる働きかけにならず、むしろ後退させることになる。法則に対し、努力を重ねて表出する結果こそが大事であるとしている。
- (12) J = ダルクローズは、音楽の中に、対象と対立の可能性を示唆している。フレーベルも教育の教授方法について、相対する考え方を示しながら、見本となる教育内容を永遠の法則とともに示している。両者とも、教育の方法について、相対する考え方からより良い考え方を見出すという点において、共通認識があると捉えることができる。
- (13) フレーベルは、「第三者（神）に従い、その支配に身を委ねることが正しい感情をもつので、見誤りが無い。」としている。それに対して、J = ダルクローズは、教師の一指導により、演奏にニュアンスが付き、自分の感情を乗せることができるようになる。また、演奏を冷静に自分の耳で確かめる能力、事例の批判や分析する精神を持つことは、フレーベルとJ = ダルクローズとの共通の認識と捉えることができる。
- (14) フレーベルは、カイルハウ教育舎での教育において、表現や行動が認識や知識より先行させた方が良いとしている。表現や行動を介しての生徒の考察の対象になっている事物やそのものの本質に従い、認識や知識が自主的に形成、創造されるように指導され、獲得された認識や知識が子どもたちに再び表現や行動に検討し、発展させられることを述べている⁴³。この表現や行動を先行し、後から認識や知識を取り組む教授法は、J = ダルクローズのリトミック教育方法と共通している点と捉えることができる。

(15) フレーベルは、「子どもは、神的なものが人間の姿を取って現れたもの」であるとし、さらに「子どもは人類の必然的本質の一員」とし、親の養育責任について自覚を求めている。「子どもは神と自然の本質」、つまり、「神（精神）」は、「自然（身体）」と調和一致させて、発展、形成しなければならないとしている⁴⁴。

J＝ダルクローズは、他人が教えようとする知的な部分に親が関心を持たない場合は、親の教育が必要になるとしており、親の養育に対する考え方は、二人とも共通していると捉えることができる。

そして、「音楽を心と身体で感じ取ること」は、子どもの神的本質を育てる為の統一的な発達、個性的かつ諸能力のある多面的発達につながるという考え方は、両者ともに共通する部分である。

J＝ダルクローズは、リトミック論文集『リズムと音楽と教育』において、フレーベルのことに触れている。1つ目は、低学年指導の音楽教育に関するペスタロッチやフレーベルの理論は、私学学校でのみ実行に移されていたこと。二つ目は、ドイツの学校では、古めかしい歌唱教育が健在で、カール・シュトルク（Storck, Karal Gustav Ludwig, 1873～1920）や他の専門家たちの示唆に富んだ提言に対し、注目せず、フレーベル学派は衰退しつつあるという2点である。当時の音楽教育に携わっていた教育者の助言に対し、学校当局、教育審議会が耳を貸そうとしなかったことや、音楽教育の重要性にすら気付いていない現状を大変嘆いている⁴⁵。J＝ダルクローズは、フレーベルの教育方針を意識し、人間の発達形成の一端を担うリトミック教育を確立させていたのではないかと捉えることができる。

おわりに

今回の研究では、フレーベルの『人間の教育』の「全体の基礎づけ」の一部を取り上げ、J＝ダルクローズの音楽教育との比較検討を行った。フレーベルの没後13年後にJ＝ダルクローズは、誕生した。同じ時代には二人の出会いは無かったけれども、少なからず二人の教育は、同じ方向を目指していたと思われる。

今後も引き続き、より深く比較検討を続けていきたい。

注

- 1 細谷俊夫、奥田真丈、河野重男、今野喜清編、『新教育学大辞典第6巻』、第一法規株式会社、1990年、pp.131-132
- 2 荘司雅子著、『フレーベルの生涯と思想』、玉川大学出版部、1975年、pp.71-76
- 3 フレーベル著、荒井武訳、『人間の教育』、岩波書店、1976年、p.86
- 4 ラインハルト・リング、ブリギッテ・シュタインマン編著、河口道朗、河口真朱美訳、『リトミック事典』、2006年、p.97
- 5 荘司雅子著、同上書、玉川大学出版部、1975年、pp.73-76
- 6 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、『リズムと音楽と教育』、全音楽譜出版社、2003年、pp.viii-x
- 7 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、岩波書店、1976年、p.11
- 8 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、p.18

- 9 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、p.9
- 10 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、p.10
- 11 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、1976年、p.13
- 12 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、pp.4-5
- 13 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、1976年、p.13
- 14 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、p.76
- 15 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、1976年、p.13
- 16 Friedrich W.A. Froebel, 『Die Menschenerziehung』, Thoemmes PressUnifacmanu, 1994, p.4
- 17 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、1976年、p.13
- 18 L. チョクシー、R. エイブラハムソン、A. ガレスピー、D. ウッズ共著、板野和彦訳、「音楽教育メソッドの比較」、全音楽譜出版社、1994年、p.222
- 19 L. チョクシー、R. エイブラハムソン、A. ガレスピー、D. ウッズ共著、板野和彦訳、同上書、1994年、p.62
- 20 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、1976年、p.14
- 21 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、p.77
- 22 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、1976年、p.15
- 23 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、p.X
- 24 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、1976年、p.17
- 25 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、pp.56-57
- 26 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、1976年、p.18
- 27 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、p.59
- 28 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、1976年、pp.18-22
- 29 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、pp.121-122
- 30 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、1976年、pp.22-24
- 31 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、p.41
- 32 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、1976年、pp.24-26
- 33 Jaques-Dalcroze, *La musique et nous* 「音楽と私たち」, Editions Slatkine Geneve-Paris, 1945, p.119
- 34 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、1976年、pp.26-27
- 35 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、pp.41-42
- 36 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、1976年、pp.27-28
- 37 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、pp.31-32
- 38 岩崎次男著、「フレーベル教育学の研究」、玉川大学出版部、1999年、pp.131-132
- 39 フレーベル著、荒井武訳、前掲書、1976年、p.29
- 40 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、p.55
- 41 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、p.59
- 42 岩崎次男著、前掲書、玉川大学出版部、1999年、pp.132-133
- 43 岩崎次男著、同上書、玉川大学出版部、1999年、pp.131-132
- 44 岩崎次男著、同上書、玉川大学出版部、1999年、pp.132-133
- 45 エミール・ジャック＝ダルクローズ著、板野平監修、山本昌男訳、同上書、2003年、pp.15-16